4．インド学の将来（未来への展望）（Ⅰ）インド学

インド学の未来像

後藤　敏文

1．　上記諸項の担当者が明らかにしているように，インド学が文献学の歴史の中で果たしてきた役割は大きい。また，現在，伝統を継承しつつ，多くの分野領域で研究が進められている。しかし，このままで未来が保証されているようには思えない。学問・研究・教育のあり方は歴史の理解と歴史意識に支えられているが，今はその転換期にあり，新たな構築が望まれる。研究の具体的仕方自体に新しい方法論があり得る訳ではない。求められているのは，これまでの研究史が解明したことの確認の上に立って，今何の解明が本質的に必要か，どの部分の研究を補い，どの部分を深化させるべきかという座標軸の確認であろう。同時に，これまで研究分野の内部で蓄積された知見を広く他の領域や社会一般に還元し，また，それらから逆に新たな視点と知見とを得て，研究を進めるエネルギーに変え，文献の現場に戻って，歴史と研究史の今が求めている宝を掘り出してくることであろう。インド学の営みの意義と興奮とを若い世代に伝え，単なる流派の継承者ではない次世代の研究者を増やし，分野全体の理念をもって支援することが求められている。しかも，これらの方策を偶然や才能に任せることなく，制度的に確保する必要がある。

これまで蓄積してきた成果は基礎作業部分にあたるものが多く，ヴェーダの宗教文献，仏典の成立，仏教の教理，ジャイナ教やヒンドゥー教の展開をはじめインドの宗教・社会・思想・歴史・言語の諸問題を証拠に基づいて検証・議論することは，やっと可能になりつつある段階に差し掛かったばかりである。近年盛んな現地研究の成果と照合する作業もこれからである。確かに難局を迎えており，整った条件の中にありながら，研究への動機付けと方向付けを失っている点が見られる。ここで現状を踏まえ，未来に必要なこと，できることを整理してみたい。

2．原典：写本と刊本，その研究

インド文献学・古典学は，原典の発見，写本の収集，刊本の出版とともに隆盛を迎えた。今日でも標準的とされる各分野の専門的概説書が刊本出版の盛んに行われた時期に，刊本が間に合わないものについては写本を用いて著された，ということを考えると，新たな資料のもつ推進力の大きさが知られる。インド学が今，全体としてそのような段階にないことは明らかである。信頼できる校訂版を作り直す作業が必要なことは各分野に該当するが，最初の出版と異なり，実現は一層の難題である。

ヴェーダのテキストでは，比較的最近アタルヴァヴェーダのパイッパラーダ派の写本と伝承とが発見され，現在校訂版の出版と翻訳研究とがインド，アメリカ，オランダ，スイス，日本（土山泰弘，梶原三恵子）の学者によって進められている。サーマヴェーダの『ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ』の写本に基づく新校訂版は藤井正人が予告してからかなりの年が経った。速やかな出版が望まれる。ジャイミニーヤ・シュラウタスートラについても同様な作業が予告されている。井狩弥介によるヴァードゥーラ派の祭式文献の出版は現在進行中であるが，未発見の重要資料を含み，単に新資料というだけに止まらない価値を持つ。報告者はこの研究計画の中で，この資料に基づ

いた一成果を発表したが，新資料が研究分野全体に新たな検証の機会を与える好例であることを示し得たと信ずる。また，井狩のこの発見と研究は，カーラントが1920年代に発表した一連の研究を継承発展して実現したものであることは，今後の研究方法の一指針として確認しておく価値がある。ブリハッド・アーラニャカ・ウパニシャッド（カーンヴァ派）のアクセント付きエディションはMaueによる第1巻が出たまま中断しているが，完本の早急な出版が求められる。ジャイミニーヤ・ブラーフマナはEhlersにより新校訂版が作られたと聞く。一部はTITUS（後述）の電子テキスト版で見ることができるが，原典修正に関する二次文献の言及を集めた博士論文からも推測される通り，編者自身の判断には問題が多いという印象をもつ。早い出版が待たれるものの，かなりの批判・検討が必要となろう。

ダルマスートラ，シャーストラ関係の校訂の見直しも行われつつあるが，この分野の問題は写本の優劣の問題であるよりも，生きた伝統が拡張・変容してゆくダイナミズムの中で解明されるべき要素が大きい。後世のプラーナ文献との対比も必要である。その意味では，今後の分野である。同様のことは叙事詩の原典についても言える。

哲学学派の文献においては，注釈文献を中心とした新写本の出版・研究が行われてゆくであろうが，インド外にある仏教論書の写本が占める比重が大きいものと思われる。建築，音楽，絵画，彫刻，武道，遊技などの諸部門の原典出版は今後に待たれるところが大きい。出版には翻訳と注記を伴うことが望ましい。農耕，調理については最近出版を見たが，研究とその利用はこれからである。こうした分野は，本来，伝統をもつインドの学者によって為されることが望ましいが，インドにおける出版の水準には近代文献学の洗礼を経ていない部分が残る。研究の国際連帯が望まれるが，「インド学」や「文献学」が植民地主義に基礎を置くかどうかといった原理原則を語るのではなく，具体的な研究遂行の中で，ねばり強く達成してゆかねばならない課題であると考える。

各地にある写本の保全と複写，できれば電子版への収録は，できる所でできる所から遂行してゆくほかなかろう。碑文研究は地道に進められており，便利な紹介書も出版された（Salomon）。仏教に関するものについては大部の集成も出版された（塚本啓祥）。碑文を歴史，言語，文化史などの多面的文脈で，しかも，インド理解という総合的な視野でバランス良く利用することは今後の課題であろう。諸々のテキストの電子版は多くの研究者の努力により為されつつあるが，フランクフルトのGippertが主催するTITUSは印欧語全体をカヴァーする大きなプロジェクトであり，それだけに普遍性をもち，一つの標準となりうる。日本からは伏見誠，徳永宗雄，井狩弥介，林隆夫，杉田瑞枝，矢野道雄，小林正人，赤松明彦，渡瀬信之，引田弘道，島岩がテキストを提供している。テキストをそのまま引き出して利用できない形式は不便である。特殊文字の問題は未だに根本解決を得ておらず，対応が望まれる。ジャイナ教典についてはパーリ教典と並んで山崎守一が貢献している。今後の入力テキストの拡大と一層の利便化が期待される。

3．翻訳

過去に翻訳されたインド古典文献は，今日，原則として全て訳し直される必要がある。それは何れの現代語訳であるかを問わない。研究史の展開が齎す質的必然性の問題である。

3.1.　リグヴェーダについては，1920年代になされたゲルトナーによるドイツ語訳が今もって標準的であり，野心的な世代の影響が去った今，その評価が高まりつつあることは正当に思われる。リグヴェーダ全体の深い理解に基づく翻訳ではあるが，例えば，当時は未だ動詞の法（願望法，接続法，Injunktivなど）がもつ機能は正確に把握されていないか，あるいは，インド学の共有財産となっていなかった。今日でも多くの概説書に，リグヴェーダの讃歌が神々に「祈願」するものであるかのように記述されているが，この誤解の遠因は，動詞の法の機能に関する理解不足にあるように思われる。神々に呼びかける場合には，主として命令法，接続法（話者の意志）が用いられ，人間たちと神々との関には厳しいgive-and-takeの関係がある。ゲルトナー以降は「リグヴェーダ研究」としてよりも，これと関連する個々の分野（特に文法の個別カテゴリーの研究，ブラーフマナ・祭式研究）において達成されたものの意味が大きい。それらを総合して改めて全訳が提供されれば，現段階での到達点を照合検証できることになり，個々の成果の当否が吟味され，必要な研究対象が明確化される。また，一般向けに，新たな読みやすい翻訳が提供されれば，リグヴェーダが人類の

遺産として持つ価値が再認識され，これだけでもインド学全体にとっての大きな宣伝となろう。現代日本語による新訳は特に望まれ，また実現可能な水準にあるが，純粋に労力と時間の観点から，全訳ができるまでにはさらに複数の世代を要するであろう。

3.2.　ブラーフマナについては，最近まで，非論理的な神秘主義の支配する理解不可能な分野であるかのごとき紹介がなされることさえあった。実際には理詰めの世界である。報告者は本研究計画において，一部を選び，原典・翻訳・注解を出版することを目標とした。原稿は整いつつあり，近々出版を目指したい。この分野では未だ現代語訳のない重要テキストが多くある。ジャイミニーヤブラーフマナは，始めの2巻についてはBodewitzの英訳があり，最近Ehlersにより第3巻がドイツ語に訳され，これによって一応の翻訳が完成したものと聞く。これまでに発表されたものから判断して水準に疑問はあるが，便宜を提供することに疑いはない。最古の散文文献を含むマイトラーヤニー・サンヒターとカタサンヒターとについては，簡素難解な表現と当時の祭式そのものに対する理解不足とから，未だに障碍が大きい。前者については散文部分の前半が天野恭子によりドイツ語訳され，一歩前進した(Diss. Freiburg 2001)。しかし，正確な訳と理解とに達するには韻文（祝詞）部分の理解と他の祭式文献の精査が欠かせず，そうした意味での翻訳の進行と地道な努力とが望まれる。遙かな道ではある。極く僅かな部分を扱ったものではあるが，西村直子によるヤジュルヴェーダ全学派の冒頭の韻文（祝詞）2節と，対応するブラーフマナ，関連する祭式文献の翻訳と検証（博士論文，東北大学2002）は，将来へ向けて一つのあり方を示す。既に翻訳のあるブラーフマナについては新訳が望まれる。シュラウタスートラの中，最古最大のバウダーヤナ派のテキストはŚrautakośa「シュラウタ祭式事典」の中で英訳が為されつつあるが，テキストそのものの全訳が望まれる。他のテキストについては翻訳が存在するものも多いが，ヴェーダ語研究，並びに祭式の展開過程を跡付ける研究と相互に支え合って改良されるべき運命にある。

3.3.　ウパニシャッドはしばしば何れかの現代語に翻訳されているが，その多くは後代の古典サンスクリット文献の理解から出発している。しかし，指摘されて久しいように，ウパニシャッドはブラーフマナを作成した祭官学者たちが作り出した文献であり，ブラーフマナの翻訳・理解が3.2.に述べたように質的飛躍に向いつつある状況を鑑みると，この方面の解明に基づいた根本的改良が望まれる。しかも，ウパニシャッドは量的にも少なく，これまでのヴェーダ研究を背景にすれば良心的な翻訳が可能である。輪廻と業というインド思想史の公理が具体的に定式化されたのはウパニシャッド文献においてであり，初期仏教・ジャイナ教への関連も無視できない。また，それだけに，インド学研究者の絶対数が多く，仏教研究が重要な位置を占め，かつ，読者層の関心も高い我が国における需要は大きい。ウパニシャッドがヴェーダを背景にした理詰めの「世界理解の学」から生じたものであることを正当に理解させるような邦語訳が求められている。

3.4.　マハーバーラタの邦訳は上村勝彦により目下出版が進行中である。今日まで連なるインド世界を理解する為には，その形成の役を担った「国民文学」であるだけに，とにかく全訳が必要であり，速やかな進展が望まれる。岩本裕が途中まで翻訳したラーマーヤナの完訳も課題である。こちらは，マハーバーラタに比べ文学的鑑賞要素が大きいが，それだけに広くアジアに広がった文化遺産であり，既存のインド学の分野を超えた寄与が見込まれる。各学派の基本文献も改めて翻訳が揃えば，新たな研究課題が再確認されるであろう。医学を始めとする科学書の翻訳・解説もより整備されることが望まれる。研究史の発展段階如何によっては，啓蒙的翻訳がかえって本来の研究を阻害することがあるが，今日，インド学は先人たちの努力と学の継続発展のお陰で信頼すべき翻訳を可能にする歴史的段階に差し掛かっており，今後は翻訳に基づいて研究が可能な領域や，手続きもあり得る。インド学を主導する位置にあったドイツ語圏では未だに叙事詩の全訳がない。専門家の研究が確固たる領域として成立していた為と考えられるが，今後は専門分野で蓄積された知見を普及することによって自らも成長してゆくべきであろう。

3.5.　「史書の無い」インドの歴史を研究する場合には，碑文は勿論，全ての文字資料が，歴史資料として活用される必要がある。その為にも，文献学者はより信頼できる，使いやすい情報を提供する使命を負っている。その意味でも学術的翻訳は推し進められる必要がある。哲学・思想の分野でも，広く普遍的座標のもとに相互検証される必要があり，事情は共通している。

4．研究

4.1.（文法研究）　ヴェーダ文献については，動詞文法の完成が焦眉の課題である。難題であったReduplikationを伴う動詞語形の研究では，Schaefer（Intensiv），Kümmel（Perfekt）による用例を網羅した研究が現れ，格段の前進が得られた。更にDesiderativとAoristの解明などを中心に，研究されるべき分野が残されている。接続法（Konjunktiv）と願望法（Optativ）の機能の研究が望まれるが，前者が堂山英次郎と，伝聞によればTichyとによって目下進行中である。未来語幹の機能の研究も必要である。報告者は第I類現在語幹を扱ったが，現在語幹についても未だ研究の手が付けられていない領域が若干ある。報告者は，これまでに29個の語根について動詞活用・派生一覧を発表したが，その完成こそが，動詞研究の分野の最優先課題であると考えている。全語根について，最古のリグヴェーダから叙事詩に至るまでの典拠に基づき，文献学的・言語学的検証と分析を経た，詳細な一覧が必要である。インド内部での発展過程を明らかにすることは勿論であるが，イラン側の所見と照合し，インドヨーロッパ祖語からの歴史的展開と，基にあった形成原理を明らかにする必要がある。幸い，印欧祖語の動詞語根と語幹一覧がRix，Kümmel他によって出版され便宜が益した。WerbaのVerba　Indoaricaは二次文献の情報源としての利用価値に留まる。報告者にとっては，協力者の養成が課題である。

接続詞についてはKlein，Dunkel等の研究が進行中であるが，前置詞，副詞等をも考慮に入れた，事実の確認と分析・説明とを兼ね備えた網羅的な文法・スィンタクスが必要とされている。音韻や名詞・代名詞，複合語については，Wackernagel－DebrunnerのAltindische Grammatikがあるが，未解決な問題や不正確な点が多い。当分はこれに依りながら，個々の研究を進めることが必要な段階であり，名詞と複合語については一部為されつつある。しかし，特に音韻部門では基本的な事項で解明されていない問題が多い。

叙事詩の文法についてはSil，E.D. Kulkarni，N. Sen，Satya　Vratを始め複数のインドの学者やBrockington，van　Daalenらによって，彼らのいう「パーニニ文法」からの逸脱形の一覧が多数発表されているが，それらを全体として網羅し組織的に論じる必要がある。その際，当然徳永宗雄による電子版とそのサンディ復元版を効率よく利用することが求められる。最近OberliesはEpicの動詞形を集めた“Epic　Whitney”を準備しているが，平板な一覧の域を出ない。

文法研究はインド文献学の基盤であり，その地位は今後も変わらない。インド学者の中に文法を扱う専門家が無くなりつつある現状は，インド学の研究と訓練の将来にとって致命的な危機である。上に触れたヴェーダ文法の諸研究も比較言語学に籍を置く研究者の手になるものばかりである。（このような訓練領域の分離は，西洋古典学においては既に昔に起こってしまったことである。）インド学の中でのヴェーダ学のハードウェアを復権させるか，印欧語比較言語学との共同作業を制度的に保証するような方策が必要である。

4.2.（韻律研究）　韻律の研究は，原典批判，原典（またはその中の層）の新旧の確定，文法研究などに欠かせないが，言語の外形を扱う文法の一領域と考えるべきものである。ことばという一つの方程式に，文法と韻律という二つの未知数（更に内容に関わる諸要素が加わる）が存在するのが文献研究の現場である。韻律研究の基礎となる知見はオルデンベルク（Oldenberg）の19世紀末から前世紀初めに懸けての一連の研究に依る所が大きい。音楽的韻律についてはJacobiの貢献が大きい。韻律の分析はパーリ仏典，初期大乗仏典，初期ジャイナ教典の研究においては特に重要な道具であるが，この方面（及び叙事詩の韻律）については，更にH. Smith，F. Edgertonの研究が先鞭を付けた。しかし，「古典インド学の歴史」，（1）インド学の2.5の項で触れたように，依然として，古典文学以外の，謂わば生きた韻律の実態には未解明な点が大きい。最近の研究には，韻律についての恣意的な取り扱いが目立つ。Arnoldのリグヴェーダの韻律研究書は未だに用いられることがあるが，根拠とはならないことが多い。叙事詩，仏典，ジャイナ教典についても同様の危険があり，Alsdorf，Norman，von Hinüber，Oberlies等の主張には，不確実な韻律規則の想定に基づいた恣意的な原典の読みの変更・選択などがしばしば見られる。WarderのPali　Metreに見られるような機械的な統計手法による傾向の指摘は，使い方次第で便宜を提供してくれるが，判断の典拠となる性格のものではない。韻律規則と，その限定ないし許容範囲を，言語分析，原典理解，伝承の吟味の複合体の中で確定する課題は，将来の研究に委ねられたままである。そうした試みへの一歩として，Junko Sakamoto-Gotoのパリ大学提出博士論文（1982）の出版が望まれる。（同『仏教研究』7，1978，64－43は韻律全般に亘って，簡潔で重要な知見を与えてくれる。）

4.3.（ヴェーダ祭式文献研究）　ヴェーダ祭式研究の将来は，3.2.に述べたマントラ，ブラーフマナ，シュラウタスートラの翻訳と密接に関わる。西村直子の「新月祭・満月祭」の準備日に関する翻訳・研究（→3.2.）は，祭式の基本型とされる新満月祭についてさえ，各原典が想定する祭式の実態は多く未解明のままであり，その歴史的展開も解明されずに来ていることを改めて示す所となった。主献供の供物についてさえ，一般に理解されているものはスートラ段階になって確立されたものである。祭式に用いられる祝詞（マントラ）の研究が祭式理解の重要な基礎となることは，この領域の基礎文献と基礎研究とを整備したカーラント（Caland）が指摘したところであるが，以来80年為されずに経過した。やっと条件が整いつつある今，マントラと古いブラーフマナを粘り強く研究してゆくことはインド学の未来にとっての一大課題である。その研究は，「輪廻と業」という，その後のインド思想をフォーマットした観念の源を解明することに繋がる。思想史的には，その背景にある「祭式と布施の効果」（iṣṭā-pūrta）という概念を巡る，ヴェーダの宗教を貫く思弁の研究が重要である。近年，阪本（後藤）純子はiṣṭā-pūrtaと5火2道説関係（エネルギー循環に関する言説を含む）の研究を発表しているが，インド思想史の大鉱脈に触れる仕事であり，この分野の更なる進展が期待される。祭式文献研究には若い世代に人材が出つつあり，今後協力し合って潜在能力を発揮して欲しい。

4.4.（生活実態，社会，文学の研究など）　ヴェーダ文献に関しては，原典や祭式についての個々の研究を越えた，伝承史，古代から中世に懸けての学のあり方，ヴェーダを取り巻く社会や制度の問題などに関する研究も為されつつあるが，実際の研究はこれからである。この分野ではWitzel，Scharfe，Jamisonなどアメリカ研究者の発言が目立つ。ヴェーダ時代の生活実態，事物の研究は一部Rauを中心に為されたが（金属，陶器，織物・編み物，車）その継続が望まれる。印欧語族に関わる考古学の分野で出版が進んでいるだけに，期待される研究領域である。ただし，ヴェーダ文献には，祭式という特殊空間を扱っている為，資料としての限界がある。Vinaya，Jātaka等の初期仏典のもつ情報は重要である。分野によっては，更に古代中世インド全体を視野に入れて研究する必要がある。農耕に関してはWoitillaの一連の研究があるが，この種のRealiaに関する文献学の進展が期待される。今後は原則として，仏教文献や後代の文献をも含めた，包括的な視野が求められる。ヴェーダ文献の暦法に関する課題については，「古典インド学の歴史」の項で触れた（：5.）。

ヴェーダの宗教文献は，人類の古今の宗教研究一般や文化の諸相の研究にとっても，文献に裏付けられた基本的な情報・比較材料を提供する資料の宝庫である。インドヨーロッパ語族の文化遺産の要素や，西南アジアや東アフリカはじめ他の遊牧社会などの文化に見られる諸要素との比較を通じて，共通する普遍的要素と，インドないしはその背景にある文化に特有な要素とを個々に確認する作業にも必要な情報源となる。ヴェーダに言及される植民活動や略奪は印欧語族の拡大の問題と関連し，場合によっては，今日の政治状況にまで連なる要素が指摘されても不思議ではない。

叙事詩や仏典のジャータカなども生活誌，民俗誌的資料の宝庫である。母権社会の存在は叙事詩には明瞭に現れるが，リグヴェーダにまで遡れる可能性がある。説話の伝承の問題も，Benfy，Hertel，Edgerton以来の研究史があるが，今日までに世界の各地域・時代から集められた資料は比較にならない量と質とに達していると思われる。新たな学際研究が望まれる。マハーバーラタが「国民文学」として果たした役割は各民族の文化史の文脈で確認する必要がある。また，叙事詩の成立そのものが人類全体の一テーマである。文学作品は社会のあり方と深く関わっているであろうが，そうした意味での文学論の中で位置づけられる価値がある。

4.5.（ヒンドゥー教，ヒンドゥー社会）　ダルマスートラ，シャーストラ，叙事詩，プラーナ等には，既述の通り（→2.），生きた伝統が拡張・変容してゆくダイナミズムの中で解明されるべき要素が大きい。その流れには現代まで引き継がれている要素があり，フィールドからの研究との照合が期待される。永ノ尾信悟は儀礼という切り口から，ヴェーダから今日までを追っている。今後，発展と研究者層・研究対象の拡大が期待される。また，文献学の現代研究諸分野との照合・総合へ向けての直接の接点ともなる分野である。

4.6.（学派文献の研究と文献学）　哲学学派の文献については，「哲学」という概念をどう理解するかという問題がある。「哲学」に地域的限定が為されうるものかどうかは，世界史をどう理解するかという問題である。その意味でも，注釈文献の精緻な研究は文系基礎学問の務めとして継続発展させてゆかねばならず，そこで為される営為が基礎であることに変わりはないが，それに留まらず，普遍的座標の下での検証，位置づけの努力が一層求められよう。また，そうした議論

の場へ資料を整備して提供する務めがあろう。普遍的価値判断と歴史的位置づけとは，インド学の全ての分野において研究者が常に定規として携えるべきことに変わりない。

哲学学派の文献研究と哲学研究ないし哲学することとは，ひとまず別の営為である。同様に，文法学派の文献やその研究は，文法研究の参考になる資料を提供するが，文法研究そのものではない。学派文献の研究には，対象が異なっても，「文献学」という営為においては共通する要素が多い。この当然の事柄も，時に再確認する必要があるように思われる。

我が国のインド学は学派研究，特に哲学学派の研究を中心に行われてきた。未開拓の分野の精緻な研究と，既に研究の為されてきた文献の再検討とをうまく調和して，引き続き実りある成果を挙げてゆくことであろう。最近は，思弁的文献の研究においても，ことばへの関心が前面に出てきているように思われるが，文法学派の文献研究そのものは停滞しているように思われる。インド思想史の基礎を支えているものだけに，今後に期待したい。個々の研究者には一つの専門に留まらない視点とインド学的素養とが特に求められる。報告者の専門外の領域であり，具体的言及は控える。

5．文献学の未来

インド学は，他の多くの営み同様，大学の講座によって担われてきた。その中心は文献学にある。文献学的方法は，すぐに目立つ成果を発信するものではないが，人類の知的財産を確実に増し，信頼できる材料を発掘し蓄積する基礎学問である。我々が歴史を議論し，自分の人生やものごとの価値を歴史と世界地図あるいは宇宙の中において位置づけることができる為には，こうした基礎学問の存在は欠かせない。インド文献研究がインド研究の全てでないことは明らかである。しかし，インドの文献資料がもつ時代的広がり，量，果たした役割，深い意義を考慮すると，文献学的営みは継承発展されてゆかねばならない。言語・文献のもつ特殊性から，これまで達成された成果は文献学の基礎分野において為された部分が大きく，研究の本領と社会への還元は多分にこれからの課題である。また，文献研究に必要な方法は専門的訓練の中でのみ継承可能な深化を経ている。インドの言語文化はインドヨーロッパ語族という背景をもち，インドイラン共通時代の文化を経てインドにもたらされたものから出発している。ゾロアスター教研究はインド文献学抜きには考えられないが，このイランの宗教は西側のメソポタミア，中近東，更にユダヤ教等と互いに関連する要素をもち，歴史的にも重要である。また，インドの地に成立した仏教は，インド文化圏を越えて東・東北・東南アジアに広まった。こうしたことからもインド文献学の役割は大きい。また，この分野の訓練が普遍的・方法論的な意味でも重要であることは，多くのインド文献学出身者が言語学，宗教学，人類学の成立や発展に果たした役割によっても示されている。

インドの文献の持つ意味について，「古典」と「文献」という観点から原則的なことを確認しておきたい。『ニューズレター』第9号への寄稿から，その注1を引用する：

> 我々に伝えられている文献は人類が歴史の中で選び取ってきた資料である。そのようなArchivの集積・総体は，我々各個人がその生を価値づける為に必要な歴史理解にとっての基礎資料であり，定規の基となるものである。「世界史」が成立し，各個人の生がその中に位置付けられるに至った今日では，個々の言語・文化の中に位置をしめる「古典」（日本の古典，あるいはその上位概念において，漢字文化圏の古典；ヨーロッパ文学の古典，フランス文学の古典...），ないし，ある文化圏，言語文化の統合体を基礎で形成する歴史的役割を担った「国民文学」（源氏物語，ホメーロス，マハーバーラタ...）などの範疇を越えて，過去の遺産の中に位置を得た全ての文字資料が人類共通の古典文献資料であり，それらの中，文献としてのまとまりを持った各corpusを「古典文献」の名で呼んでよいように思われる。文献資料が原則として誰にでも利用・検証できる形で公開されていることは，今日に於ける世界史理解にとって，基本的意義をもつ。

伝統と批判，文化遺産の評価は，原材料が正確に呈示されて初めて成り立つことである。各地・各時代の文化の特殊性は，人類の普遍史の中に位置づけられて初めて価値を持つ。

大学におけるインド学が文献学のみでよいということではないが，引き続き文献学が中心となるべきである。例えば，現代インドについての社会学を目指すならば，社会学と現代インド語を学ぶことが先であり，それにはそれぞれの専門がある。しかし，インド社会固有の現象を扱う為には，歴史的習慣，思想的・宗教

的伝統の理解が不可欠であり，その基盤となる情報を提供するのはインド文献学である。即ち，社会学とインド文献学との融合が求められる。同様に，政治，経済，法律，歴史，文学，美術，音楽等の全ての分野についても，インド学のこれまでの伝統の上に立って，その上で，隣接諸学科との協同が必要である。例えば中国学（シナ学）ならば，語学，文学，哲学・思想，歴史，美術史に亘って専門家が同一大学にいることが多い。インド学の場合には，限られた例外を除き，講座が小さくスタッフが少ない為，多様化しにくい不利を背負っている。大学を越えたインド学研究者間の協力は当然であるが，その他の文献学・人文学，さらにはそれ以外の訓練領域と連繋を模索する必要がある。また，同じ文献学者間の次元で行われる協同には限界がある。異なった専門領域をもつインド学者たちが有意義に意見を交換する為には，インド学以外の文献学者と一緒に議論する必要がある。同様に，諸領域の文献学者・古典学者が真に協力する為には，文献学・古典学を越えた次元で，他の専門家と討論を重ねる機会が必要である。このことは4年間の本研究計画が教えた重要な事柄である。

6．学の継承発展，教育

どの訓練領域（Disziplin）も人によって担われている。インド学は，世界的規模で見た場合には，学の継承，次世代の養成が，比較的うまく行われてきた分野といえるであろう。しかし，現今の社会情勢，大学のあり方と訓練領域内部の発展段階とから，難しい局面を迎えているように思われる。大学の講座が機能していた時代には学界内の役割分担もそれなりに機能していた。基本知識の中には当然のこととして共有され，いわば口伝によって伝えられ書かれていなかったものもあった。最近では，そうした前提を備えていなかったり，逆に当然のことについて，どこにも書かれていないと主張して発表する者も現れ，驚くことがある。Grundriss（学術的概観）が必要とされていることは明らかであるが，最近出版され始めた嘗てのGrundrissシリーズの改訂版を謳うものは，批判に堪えない水準である。批判によって制度的疲労を救う工夫が必要である。歴史意識と責任感は批判に支えられる。批判はことばによって力を持つ。意見交換のしやすい開かれた学のDisziplinを築き，特に若手や学生たちが恐れをもたずに発言できる機会を増やす必要がある。どこかに「新しい方法論」が転がっている訳ではない。互いのもっている知見・技量を交換し合って深化に用いねばならない。我が国の場合には，広くインド文献学の諸領域に開かれた学術雑誌が必要である。当然，我が国で盛んな仏教研究を包摂する。書評や紹介には困難がつきまとうが，勇気を持って行うべきであろう。研究や訓練について，ヴェーダ，インド哲学，仏教，更にその中の細かい専門内部だけで行い得ることには限界がある。俗になわばりと呼ばれるような専門意識は阻害要素である。この報告もインド学とインド仏教学とに分けられているが，あくまで便宜上のことであり，学問領域として分けられるべきものではない。

研究と教育とが同一人格によって担われるべきであるとするのがHumboldtの唱えたドイツの大学の理念であった。インド学研究者の質は授業に支えられている面がある。ただし，大きなプロジェクトを完成させる為には研究所の果たす役割も大きい。今日のような多忙な時代にはなおさらである。研究所を共同利用にするとか，期限を設けて学部・大学院と交代するとかできれば理想的である。大学間での交流も拡大される必要がある。人員の限られたインド学の分野では師弟の結びつきが強くなるのは当然であるが，流派的な固定は質の低下を齎す。規模の大きい大学でも各分野の専門家が揃う訳ではなく，また，複数のスタッフの間に現実に協同が機能しているようには見えない。できることから実行に移せないものであろうか。大学院間格差はインド学の学問的あり方とは直接関わらない事柄であるだけに，博士論文の質・量の改善を促進し，後進の訓練・指導に一層の拍車を懸ける中で解消してゆくべきである。現今大学の周囲から指摘される事柄の中にはもっともなものがあり，受け身ではない対処が望まれる。公募制は公職に関しては当然であり，優秀な人材があれば傾向・分野を問わずに採用して分野を活性化することが必要となることもあろう。優秀な人材の出る分野が求められている分野であることが多い。若手研究者の育成の為には，任期制の研究職・教育職の積極的活用も考慮に値する。これまでは欧米やインドで為される仕事を見ながら研究・教育をしていれば済む面もあったが，今後は日本のインド学が担う役割が大きい。それだけに我々一人一人に懸かる責任には更なるものがある。

教育の現場では，上述のGrundrissの問題に加え，簡素な学問文法の必要性が痛感される。インド文献学が扱う言語は学問の対象であって，その為に必要な文法は抽象的骨組みと枠組みである。目下使われている

文法の中には，規範・約束を教える学校文法（サンスクリット美文学はこのように作られるべきであるというような）と，原典を分析して得られる，また，原典のもつ言語の分析に資する学問文法との間の，理念的区別をせずに書かれたものが目につく。さらに，その上にパーニニ学派の伝統文法が規範や実例として混ぜ合わされている。教室外では多様な需要があろうが，訓練の現場では困ることが多い。文献学の堅持と柔軟な啓蒙的コースとの配分にも工夫が求められる時代となった。